# 私の歩んだ道

小林　元治

①

## 津山と母

私の郷里は、岡山県の北に位置する津山市である。津山市といえば、寅さん好きには「男はつらいよ」最終作のロケ地として知られているだろうか。歴史は古く、江戸の昔に遡れば、関ヶ原の戦いの後に、森忠政が信濃川中島藩からやってきて津山藩を立藩し、以後城下町として栄えた町である。蘭学者や洋学者が多くでたことでも知られ、例えば、日本で最初の化学書と言われる「舎密開宋」（せいみかいそう）を出版した宇田川榕菴は津山の出身である。

私の生家は、津山市中心部から更に中国山地へと北上した加茂町という山間の静かな田舎町に在る。先祖は平家の落ち武者とも言い伝えられ、自宅には甲冑や刀が残っていた。父母の代には、田畑でコメやトマトを作り、山から杉やヒノキを切り出して生計を立てていた。母は気丈で勤勉で社交的。「人と人とのつながりを大事にしなさい」「自分より年下の子には優しくしなさい」と諭されていたことが記憶に残る。小学校に入る前の私を近所のお使いに一人でやらせ、お辞儀の仕方や言葉遣い、話すことの要領をその都度教えられたことを覚えている。今思えば、その中で人への気遣いや礼節を教えようとしたのではないか。母が日ごろ口にしていた忘れられない言葉。「実るほど頭をたれる稲穂かな」、享年96歳で平成29年に亡くなったが、今でも母の言葉が身に染みる。学生の頃、そして結婚してからも、私が帰るというと、母はカレンダーに丸をして首を長くして待ち、赤飯を炊き、餅をついて食べさせてくれた。東京に戻るときには加茂駅まで送ってきて、「帰るまでが楽しみだ。もう戻るのか。今度はいつ帰るのか」といつも涙を流していた姿が今となっては懐かしい。「親孝行したいときには親はなし」もっと親孝行できたのにという思いは残るものの、人の道を身をもって教えてくれた母には感謝している。

昭和３２年3月１８日 元治５歳
小豆島巡礼の旅極楽寺にて母と共に

さて幼少時代に話を戻そう。私は、小学校に上がると、往復10キロ先の加茂町立上加茂小学校河井分校まで片道1時間かけて通学した。低学年のときでこそ物静かな恥ずかしがり屋であったが、長ずるに及んでワンパクになっていった。高学年になると、学校で悪戯をしたり、よその畑のスイカを拝借したりして遊んだものだ。家の近くには、岡山と鳥取の県境に横たわる物見峠を貫く因美線物見トンネル（全長３０７７メートル）があるのだが、ある日、私は、まだ見ぬトンネルの向こうの世界が無性に見たくなった。好奇心を抑えられず、近所の子ども4人を引き連れて、トンネルの中に入ってみることにした。汽車が通り抜けるときは線路横の待機穴に一斉に身を寄せ、汽車の疾風を身体全体で感じた。帰るころには日も暮れて、服は煤だらけであった。近所では子ども達がいなくなったと大騒動になっていたようで、普段は優しい母に、その日は大目玉をくらったことは言うまでもない。